伝統技術の〝尻挟み継ぎ〟

茶室の柱よみがえる

宮之城高技専生

県立宮之城高等技術専門校（さつま町）建築工学科の2年生が、数寄屋造りの茶室でリフォームに挑戦した。縁側に差し掛かる土庇（ひさし）の柱が傷んでいたのを、「尻挟（しりばさ）み継（つ）ぎ」と呼ばれる伝統的な技術で補修した。

根元を補修した柱と訓練生たち。土台には川内川河川敷の石を使った
＝薩摩川内市平佐町

茶室は1974（昭和49）年に建てられた茶道教室の稽古場で、薩摩川内市平佐町にある。19～34歳の男女15人が、校外実習として柱3本の補修に取り組んだ。柱はヒノキの丸太で直径12㌢、長さ2・5㍍。腐った根元を45～65㌢切り落とし、京都の北山杉で作った部材を継ぎ足した。

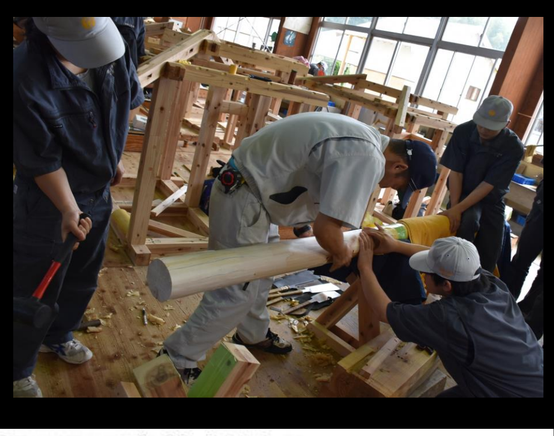
くぎを使わずに接合するため、継ぎ目部分に「込み栓」と呼ばれる木片を通して固定。柱2本は持ち帰って加工できたが、1本は抜けず、現場であおむけになって作業するなど苦心した。「神社の社殿建築にも取り組んできたが、既存の建物の修繕は初めて。失敗は許されなかった」と指導した上村大作技術主査(41)。

工事は長雨に悩まされながらも2週間ほどで完了。堀段勇気さん(34)は「古き良きものを維持する難しさ、大切さを感じた。丸太の柱は梁（はり）にぴったり付いていて、当時の大工さんの仕事ぶりも学べた」と振り返った。

23日に引き渡しがあり、施主の牛鼻亜希子さん(47)は「きれいな仕上がりに驚いた。茶と木造建築という日本の文化を、お互いに長く伝えていけたら」と話した。（本坊弓子）

柱の根元で作業する訓練生
（宮之城高等技術専門校提供）

南日本新聞記事　2019年（令和元年）8月1日



木造伝統技術に挑戦

茶室の土庇を補修

宮之城高等技術専門校生

宮之城高等技術専門校は、薩摩川内市の数寄屋造りの茶室を補修する現場実習で、木造建築の伝統技術に挑戦している。建築工学科2年生15人が土庇（どひさし・地面に柱を立て、深く張り出した庇）の腐った柱部分を取り除き、新しい材料で継ぎ足す根継ぎといわれる作業に取り組んでいる。

丸太の金輪継ぎなどに挑んだ専門校生＝薩摩川内市の現地

同校では、木造住宅施工現場実習として、これまでに同市の諏訪神社本殿や拝殿改築ほか、社務所新築、県の公共工事のトイレ改修等を実施してきた。施主から相談を受けた数寄楽舎が継手のひとつである丸太の金輪継ぎ（かなわつぎ）を必要としたため、同校に紹介した。

作業は、土庇の柱（丸太・直径120㎜、長さ約3ｍ）3本の根継ぎ。そのうち2本は偶然にも取り外せたため、腐った部分を切り落とし、磨き丸太として茶室や数寄屋に重用された北山杉を使用。両部材の口にT字形の目違いをつけて組み合わせ、栓を差して固定する金輪継ぎを製作した。土台となる石も川内川から、利用できそうなものを調達。生徒らは3班に分かれて、上村大作技術主査の指導のもと、各作業に取り組んだ。20日ごろには工事を終える予定。

作業を行った長濱千郷さんは「失敗できないので、しっかりとした作業を心掛けた。これまでは角材ばかりだったので、丸太の芯の出しや切断は難しい」と苦労を振り返った。

茶道の先生で施主の牛鼻亜希子さんは「茶室にも伝統技術が取り入れられている。そうした技術を守ってほしい」と話した。

鹿児島建設新聞記事　2019年（令和元年）7月18日

茶室土庇補修工事

■Data
依頼主／茶道家　牛鼻亜希子
　　数寄楽舎　中俣知大
場　所／薩摩川内市
種　別／茶室土庇

■Schedule
工　期／令和元年7月

■Trainee
補修工事／建築工学科 14期生

2019　木造建築施工現場実習

鹿児島県立宮之城高等技術専門校

Kagoshima Prefectural Miyanojyou Technical Training School